

## ワンダーフォーゲルとピークマニア

山にはずいぶん登った。

たいていの大学には「ワンダーフォーゲル（ワングル）部」という、山に登ったり、スキーをやるクラブがある。当時、計画する山行の厳しさは、厳しい方から、山岳部、ワングル部、山の会、山同好会の順序だったと思う。私は体力のない一匹狼を自認していたので、どのクラブにも属さなかったが、いろいろな山行でワングル部OBのお世話になった。

ワンダーフォーゲルというドイツ語は渡り鳥の意で、二十世紀初め、ドイツに始まった、山野を歩く学生・青年の徒歩旅行を指す。しかし、日本に輸入されて、その意味が変わってしまったようで、ワングル部は山のピークを目指した。途中、通過する山裾はアプローチと称した。ただ、原則としてロッククライミングはやらなかった。その点で山岳部と一線を画していた。

のちに、深田久弥の「日本百名山」が出版されて、山のピークを目指す傾向がますます強まった。そのへんの事情を反映してか、登頂したピーク数の勘定に忙しい自分達を、自嘲的に「ピークマニア」と言った。本来のワングルは、トレッキングと名を換えて、外国に舞台を広げていった。

生物という存在を理解するのに、化学の手法を使う自然科学の一分野を生化学という。この生化学の世界で、新発見をする実験室の研究がよく登山に譬えられた。ノーベル賞に値するような大発見は、麓から見えない、近づいてもいつも雲に覆われた、高い頂きを極めることに匹敵し、一方、おおかたの発見は、すでにあるマップをより詳細に画くだけだ。大先生いわく、「若い有為な研究者が、鋭いピークを目指すあまり、技量不足で岩壁から転落するのは見るに忍びない。裾野に広がるお花畑で、ときには遊んで欲しい。」ワングル精神、トレッキング精神、万歳！しかし、そのあと「お花畑」から「大発見岳」に至る登山ルートについては、考えても考えても、霧がかかったように、凡人にはわからなかった。

そんなことを考えながら、この随想のタイトルを「化学と生物の里山へキマグレ散歩」とした。里山は、「裾野に広がるお花畑」よりずっと低い標高に位置する。雪溪そばの高山植物やハイマツはなく、温暖な気候に適した植物が繁茂する。人里にもごく近い。そんな感覚で「キマグレ散歩」を書く。

---